

Title	Mouse Geminin Inhibits Not Only Cdt1-MCM6 Interactions but Also a Novel Intrinsic Cdt1 DNA Binding Activity
Author(s)	柳, 憲一郎
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43889
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について〈/a〉をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	柳 憲一郎 <small>やなぎ けん いちろう</small>
博士の専攻分野の名称	博士 (医学)
学位記番号	第 17595 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学系研究科情報伝達医学専攻
学位論文名	Mouse Geminin Inhibits Not Only Cdt1-MCM6 Interactions but Also a Novel Intrinsic Cdt1 DNA Binding Activity (マウス geminin は Cdt1 と MCM6 との相互作用だけでなく Cdt1 の DNA 結合活性も阻害する)
論文審査委員	(主査) 教授 花岡 文雄 (副査) 教授 杉野 明雄 教授 野島 博

論文内容の要旨

【目的】

染色体 DNA の複製は細胞周期により厳密に制御されており、一度の S 期にただ一度のみ行われる。酵母及びツメガエルを用いた分子遺伝学的、生化学的解析から、複製開始制御機構とは DNA 複製開始点 (origin) における複製前複合体 (pre-RC) の形成とその活性化機構であることが明らかになってきた。酵母においては、pre-RC は ORC、Cdc6、Mcm2-7 が origin 上にロードされることにより形成される。しかし、酵母以外の真核生物では origin は定かではなく、染色体上のどこに、どのように pre-RC が形成され、いかにして活性化されるのか未解明のままである。

最近、pre-RC を構成する新規の因子として Cdt1 が同定された。分裂酵母、ツメガエルにおいて Cdt1 は染色体複製に必須であり、Cdt1 の ORC 依存的なクロマチンへの結合が Mcm2-7 のクロマチンへの結合に必要であることが示された。また、Cdt1 の阻害因子として geminin も同定された。geminin は Cdt1 と強固に結合し、Mcm のクロマチンへの結合を阻害することで pre-RC 形成を負に制御する因子である。Geminin は多細胞生物においてのみ単離されており、Cdt1-geminin による pre-RC 形成の制御機構の解明は、多細胞生物に特化した複製調節機構を明らかにしうるものとして注目されている。そこで我々は、哺乳類細胞における Cdt1-geminin システムの分子機構を明らかにするためにマウス Cdt1 (mCdt1) の cDNA クローニングと機能解析を行った。

【方法ならびに成績】

ホモロジー検索による cDNA クローニングの結果、mCdt1 は 557 個のアミノ酸からなり、ヒト Cdt1 と 72%、ツメガエル Cdt1 と 46%、ショウジョウバエ Cdt1 と 25% の相同性を有した。特徴的なアミノ酸モチーフを検索したところ、mCdt1 に顕著なアミノ酸モチーフは見出されなかった。アミノ酸配列のアライメントと 2 次構造予測により、mCdt1 は異種間で相同性の低い N 末端領域と、ヒト、ツメガエル、ショウジョウバエを含む多細胞生物においてのみ相同性の高い中央部分、さらに酵母からヒトに至るまで相同性の高い C 末端領域との大きく 3 つのドメインから構成されることが示唆された。

各ドメインの機能を明らかにするために、酵母 two-hybrid 法および精製組換えタンパク質を用いた解析を行った。

酵母 two-hybrid 法を用いた解析から、mCdt1 が *geminin* 及び *Mcm6* と強く相互作用することを見出した。また、弱いながらも *Orc2* との相互作用も検出するに至った。そこで、組換えタンパク質を用いた *in vitro* における機能解析をさらに進めた。抗 mCdt1 抗体を用いた共免疫沈降実験による機能解析の結果、mCdt1 と *geminin*、MCM6 との相互作用が検出された。mCdt1 の欠失変異体による解析から、中央領域 (177-380 アミノ酸) が *geminin* と、C 末端領域 (407-477 アミノ酸) が MCM6 と相互作用することが示された。これは、酵母 two-hybrid 法による結果とよく一致していた。加えて、Cdt1 と *Mcm6* の相互作用は *geminin* 存在下で阻害されることも明らかとなった。

一方、DNA セルロースおよび electrophoretic mobility shift assay (EMSA 法) を用いた解析から、mCdt1 の N 末端領域 (1-293 アミノ酸) が一本鎖および二本鎖 DNA の両者に配列、構造非特異的に結合することが示された。また、mCdt1 の DNA への結合は *geminin* 存在下において阻害されることも見出した。

【総括】

本研究において、mCdt1 と *geminin*、MCM6、*Orc2* との相互作用を検出するに至った。また、興味深い生化学的活性として Cdt1 が DNA 結合能を有することを見出した。これらの結果は、Cdt1 が pre-RC の構築に深く関与することを示すものである。さらに、*geminin* が Cdt1 の 2 つの特性、すなわち MCM6 および DNA との結合、を中央ドメインへの強固な相互作用を通して阻害する、という pre-RC 形成制御の分子メカニズムを初めて示すに至った。今後、Cdt1-*geminin* 系を中心としたさらなる解析が進むことで、未だ明らかになっていない高等真核生物における origin 認識および活性化機構の解明につながると考えられる。

論文審査の結果の要旨

Cdt1 は複製前複合体形成に必須の因子であり、Cdt1 のクロマチンへの結合が *Mcm2-7* のクロマチンへの結合に必要であることが酵母、ツメガエルにおいて示されている。また、*geminin* は Cdt1 と強固に結合し、*Mcm* のクロマチンへの結合を阻害することで複製開始を負に制御する因子である。そこで、哺乳類細胞における Cdt1-*geminin* 系の分子機構を明らかにするために、マウス Cdt1 (mCdt1) の機能解析を行った。

酵母 two-hybrid 法や共沈降実験による機能解析の結果、mCdt1 の中央領域で *geminin* と、C 末端領域で *Mcm6* と相互作用することが示された。また、*Orc2* との相互作用も弱いながら検出された。一方、DNA セルロース及びゲルシフト法を用いた解析から、mCdt1 が配列、構造非特異的な DNA 結合能を有することが示された。さらに *geminin* の存在下により mCdt1 と *Mcm6* との相互作用及び mCdt1 の DNA 結合活性が阻害されることが明らかになった。以上の結果から、*geminin* による再複製阻害の分子機構が示されると共に、Cdt1 が複製前複合体の中核を担うことが示唆された。

本研究は、未だ明らかになっていない高等真核生物における origin 認識および活性化機構の解明への分子基盤となるものであり、学位の授与に値すると考えられる。